



少年達と犬達  
SYOUNEN AKI TO INU-TACHI  
大 II

AUTHOR KANTO

原作：カント

ILLUSTRATION TYAZAKURA

イラスト：茶桜



Asian Kung - Fu Project



# 少年達と達天 II

SYOUNEN TAI TO TENJACHI

監カント 監茶桜 produce by





## サトシ

ショウタ、ノソミと同じ孤児院の出身で、彼らの幼馴染。穏やかで、勉強の出来る優等生。運動は苦手だが、その人柄と知性が、運動音痴のマイナス分を多分にカバーしている。ショウタたちと共にゲーム内にタイフしたはずが、彼だけが別の地点からのスタートとなっていた。

ゲーム三日目、幼馴染一人と再会を果たすのだが、炎とアバウトを操る魔法のような力身につけた彼は、ある事実を一人に突きつける。

本編のヒロイン。ショウタ、サトシと同じ孤児院で育った、心優しい温順な少女。三人の中では妹のようなホジションで、分らないことは側でもサトシに質問しようとする體態にある。ショウタたちに連れられてやってきたゲーム内で、まさかの猫化を遂げる。

とある事件によってショウタと離別してしまうが……。

## ハズミ



## ショウタ

本編の主人公。運動神経が良く、また明るいう性格で、誰からも好かれる少年。が、頭の斤はあまりよろしく無い。ノソミ、サトシとは幼馴染で、彼らとは同じ孤児院で育った。

仮想空間で敵と戦うアーケードゲーム『Evolution』の最新ステージにノソミ、サトシと共にタイフする。ゲーム内では『勇者』として何人達に迎えられた彼だが、ゲーム三日目、変化した幼馴染と対峙することになる……。

テュアレイの姿に、一抹の不安を抱く。『自分の今いる場所は、本当にゲームの中なのか？』

ゲーム三日目。スレイ前の精霊では最終日と指定されているその日の夜、ショウタとノソミはようやく、サトシと再会する。炎を生み出し、アバウトの解れを操る魔法のような力にしていた彼は、ショウタたちの目の前で何人を撃殺しながら、言い散つ。『自分たちは、もう二度と元の世界には戻れない。そういう場所に来てしまったのだ』否定するショウタ。対峙する両者。その間で、スレイ終了を示すアラームが鳴り響く。そして、彼らの『ゲーム』は、終わりを告げた。

目的も任務も不明の少年。ショウタたちのやって来たゲーム内で、何やら一人で行動しているようだ……？

## 少年



### ■ 前回までのあらすじ

今よりも少しだけ未来。孤児院で育ったショウタ、ノソミ、サトシの三人は、仮想世界を自由に動き回ることの出来るアクションゲーム『Avalon』の新ステージをスレイする。スレイ前の設定で黒猫の姿に変わったノソミを引き連れ、『勇者』としてゲーム中の村を誂れるショウタ。彼は一緒にスレイしているはずのサトシの姿が見当たらないことを疑問に思いつつも、村を襲う化け物『アバタイト』を倒すことに。だが、ゲーム二日目。アバタイトよりも巨大な化け物『グラン・アバタイト』と戦うことになったショウタは、彼を救う為に命を落としたゲーム内のキャラクター、



## CONTENTS

- 00 夕陽と右手
- 01 雨の墓場
- 02 再会と出会い
- 03 襲撃
- 04 神
- 05 神との戦い
- 06 憎悪
- 07 闇
- 08 日、炎、潮、時
- 09 夜明けと絶望

## 00 夕陽と右手

「ねえー、あぶないよー」

黒い猫のぬいぐるみを抱きながら、少女は言った。彼は懸命に右手を伸ばし、少女に返す。

「だいじょうぶだつて！ それより、ちゃんと見張つてろよ。先生が来たら、すぐに言えよな」

右手が、硬い感触を掴んだ。ザラザラした手触りを確かめてから、彼はまた、その手に力を入れる。

「よし、あともうちょっとだ！」

滲む汗の中、彼は笑顔で言った。ほぼ真球に近い形のそのジャングルジムの頂上付近を、這うように進みながら。

「サトシ、ちゃんと来てるか？」

「う、うん」

怯えた声色で、幼馴染は返してきた。恐らく、幼馴染は今、彼のすぐ後ろ……ジムの側面付近

を登っているところだろう。が、流石に振り返って確認出来る程の余裕は、幼い彼には存在して  
いない。

目の前にある鉄の骨組みは、どれもただれたような跡と共に、赤茶けた錆を露出させている。  
そして、その他に目に映る全てのもの——視界の端にある孤児院の門、すぐ傍に立つ大きな木、  
そして大地——は、正面から射す赤い光で、どれも紅に染め上げられていた。

錆と、汗の匂いが、ふんわりと空気を包んでいる。

その中を、彼は進んだ。少しずつ、少しずつ。真下を見ないようにしながら、球の頂点へ向かっ  
て。そして——。

「や………った………！」

ずり落ちそうになる体を支えながら、彼は小さく呟いた。目の前の骨組みは、もはや天ではなく、  
地へ向かっている。右も、左も。

頂点だ。

「サトシ、着いた！ 着いたぞ、俺っ！」

嬉しくなつて、彼は首を後ろに回した。幼馴染はというと、将に今、彼の足が置かれている骨  
組みへと手を伸ばしている所だ。

「サトシ、もうちょっとだ！ もうちょっとで俺たち、勇者だぞ！」

「ダメだよ、シヨウタ……僕……」

はしゃぐ彼とは対照的に、幼馴染は目の前の骨組みをじっと見つめたまま、動かなくなっている。その足がガクガクと震えているのを、骨組み越しに、彼は見た。

「サトシ、ほら！」

頂上の骨組みに座り、彼は幼馴染へ向かって、精一杯手を伸ばす。じつとりと汗で濡れた肌が、緋色の輝きを放った。

「でも……」

「だいじょうぶだって！」

ニツと笑い、彼はグツと身を乗り出し、幼馴染へと更に手を近付けた。

ジムの下から、少女の制止の声が響く。遠くから届く風が、彼と幼馴染の間を、静かに過ぎていく。その中で、彼は手を伸ばし続けた。自らの掌に、幼馴染のそれを収めるべく。

……ゆっくり、幼馴染が視線を上げた。そして恐る恐る、幼馴染はジムから片手を離す。

「落ちないかな……」

「落ちないって！ だいじょうぶ、俺を信じろ！」

手を伸ばし始めた幼馴染へ、彼は力強く言い放つ。自重を支えている片方の手が、汗で滑りかけていることにも構わずに。

——が。

「お、おい、サトシ？」

戸惑い、彼は問いかける。突然自身の手を引つ込めた、幼馴染の行動に。

何も言わず、幼馴染は再び視線を落とした。そして——。

「おい！ どこ行くんだよ！」

ジムを素早く降り、真つ直ぐに彼らの家へ……西洋風の孤児院の扉へと走っていく幼馴染に、彼は大きな声で叫んだ。

幼馴染は、振り向かない。夕陽を背中に受け、一目散に走っていく。

「サトシ……」

呆然と、彼はその背中を見つめる。先程までの達成感が消え失せ、代わりに胸には——。

「シヨウタツ！」

不意に、少女の声が響いた。そこでようやく、彼は自分の手が——自重を支える左手が、骨組みから外れていることを知る。

小さく、声にもならない声を上げる彼。視界は反転し、真つ赤に染まり、妙な浮遊感が体を包む。全ては、一瞬だった。天が自身から遠ざかり、頭に強い衝撃が走り、続けて鈍い音が体中から響く。痛みの中、涙の中、彼は無意識に、孤児院へと目を向ける。

駆ける幼馴染の姿は、  
もうそこには無かった。